

4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 温州みかん、中晩柑類のあら摘果</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○温州みかん、中晩柑類のあら摘果 ○温州みかんのマルチ被覆 ○土壌管理 <p>1か月予報では、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は平年並みか高い見込みとなっている(高松地方気象台6月22日発表)。</p> <p>7月は果実が肥大する時期であるため、土壌の水管理など天候と樹の様子を観察しながら管理を行う。また、梅雨後期の集中豪雨に備え排水路の点検整備を行う。</p> <p>温州みかんではM・S果、中晩柑類では2L～3Lの大玉果を主とした高品質果実を生産するため、7月にあら摘果を行う。樹ごとの着果・新梢量に応じた早期の摘果を行うことで初期肥大を促進し、着果負担を軽減する。</p> <p>ア 温州みかん</p> <p>(ア) 着果量が極端に多く、新梢の発生がほとんどない樹 隔年結果を防止するため、7月上旬までに樹冠上部の1/3程度を全摘果し、夏枝を発生させ来年の結果母枝を確保する。発生した夏枝はミカンハモグリガ等の防除を行う。</p> <p>(イ) 着果量が中程度であり、新梢が発生している連年生産樹 着果負担をかけ品質を高めるため、あら摘果は7～8月に軽く実施する。亜主枝や側枝に直接着いた直果、軸太果、極小果などを中心に除去する。8月下旬以降の仕上げ摘果に重点を置く。</p> <p>(ウ) 着果量が少ない樹 あら摘果は控え、9月以降に仕上げ摘果を行う。</p> <p>イ 中晩柑類 あら摘果は着果過多の樹や樹勢が低下している樹から行い、直果、奇形果、傷果、内成り果、極小果等を除去する。 伊予柑は、早期に強く摘果すると果皮の粗い大玉となってしまうため、葉果比で50～60枚程度に調整し、有葉果を中心に残す。また、着果量が少ない樹は仕上げ摘果に重点を置く。 「不知火」などは、早期にあら摘果を行うことにより、大玉果生産や夏枝発生による樹勢の維持ができる。また、樹体への負担が軽減し、隔年結果を防止することにもつながる。</p>

項 目	作 業 内 容			
	表1 中晩柑類の摘果の日安			
	品種	あら摘果	仕上げ摘果 時期 葉果比	留 意 事 項
	伊予柑	6月下 ～	8月下 ～ 80-100	・着果が少ない樹は仕上げ摘果を中心に行う ・あら摘果は5～7枚の有葉果を残し、葉果比で50～60枚程度に調節する
	不知火	6月中 ～	8月中 ～ 100-120	・あら摘果は果実肥大促進のために早期に行い、7～8枚の有葉果を残す
	ぼんかん	7月下 ～	9月上 ～ 80-120	・あら摘果では5～6枚の有葉果を残す ・あら摘果は軽く行い、仕上げ摘果に重点をおく
	清見	6月下 ～	8月中 ～ 80-120	・着果過多樹は早期に摘果を行い、果実肥大を促す ・あら摘果では5～6枚の有葉果を残す
	せとか	6月下 ～	8月中 ～ 80-100	・あら摘果は5枚以上の有葉果を残し、葉果比で60枚程度に調節する
	愛媛果試 第28号	6月下 ～	8月中 ～ 80-100	・あら摘果に重点をおき、強めに摘果する ・ヘソ有り果は早期には見分けにくいので注意する
	甘平	6月下 ～	8月中 ～ 80-100	・あら摘果では主枝先端部や極小果を中心に摘果を行う ・8月から10月中旬にかけて裂果果実を除き、最終的には葉果比120を目安に樹上選果する
(2) 温州みかんのマルチ被覆	<p>マルチ被覆を行うことで降雨が遮断され、樹体に水ストレスがかかり、高糖度で着色に優れた果実を生産することができる。小玉果や酸高果の発生を回避するため、マルチ被覆後は過乾燥を避け、降雨や樹体の様子に注意しながら適宜かん水を行う。園地条件によっては被覆方法（全面マルチや部分マルチ）を選択する必要があり、水田転換地や平坦地などでは果実の糖度が上がりにくいことから全面マルチを行う。</p> <p>被覆前には、大雨時の災害防止対策として排水路を設置する。なお、土壌が極端に乾燥している場合は、10 mm 程度のかん水を行ってから被覆する。被覆後は、マルチ内に水が入ったり、マルチ資材が風で飛ばされたりしないよう、株元や端部を専用金具や</p>			



写真 マルチの全面被覆

項 目	作 業 内 容												
<p>(3) 土壌管理</p>	<p>土嚢袋等で固定する。また、鋼管などを利用して巻き上げ方式にすると、シートの開閉作業が容易となり効率的である。</p> <p>表2 マルチの被覆時期の目安</p> <table border="1" data-bbox="549 465 1311 660"> <thead> <tr> <th>種類</th> <th>全面マルチ栽培</th> <th>部分マルチ栽培</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>極早生</td> <td>7月上旬～下旬</td> <td>6月上旬～下旬</td> </tr> <tr> <td>早生</td> <td>7月上旬～下旬</td> <td>6月中旬～7月上旬</td> </tr> <tr> <td>普通</td> <td>7月中旬～8月下旬</td> <td>6月中旬～7月上旬</td> </tr> </tbody> </table> <p>ア かんきつ</p> <p>7月は果実肥大が盛んな時期であり、樹体の水分要求量が高まるため、十分な土壌水分が必要である。干ばつで土壌水分が少ない状態では、旧葉の落葉や果実肥大の抑制、樹勢低下などの症状が発生するため、10日間程度降雨がなく、日中に葉が巻き夜間には戻るような予兆があれば、10mm程度のかん水を適宜行う。</p> <p>特に「不知火」・「ぽんかん」等は、他品種より果皮や果実からの蒸散が多く、土壌の乾燥による酸高が懸念される。乾燥しないよう早めのかん水が必要で、乾燥状態が1週間以上続く場合は20～30mm程度のかん水を行う。</p> <p>イ 落葉果樹（キウイフルーツ、かき、なし、ぶどう）</p> <p>乾燥が続くと、葉の萎凋や樹勢の低下、果実肥大の抑制が懸念されるため、20mm程度のかん水を適宜行い、果実肥大と樹勢維持を図る。特にキウイフルーツは浅根性で、根の横方向への広がりも狭いことから土壌乾燥による影響を受けやすい。また、蒸散量も多いため数日の晴天で葉が萎れたり、ひどいときは落葉したりすることから注意する。果実は7月までに全果実肥大量の70%程度まで肥大するため、降雨が少ない場合は定期的なかん水を行う。</p>	種類	全面マルチ栽培	部分マルチ栽培	極早生	7月上旬～下旬	6月上旬～下旬	早生	7月上旬～下旬	6月中旬～7月上旬	普通	7月中旬～8月下旬	6月中旬～7月上旬
	種類	全面マルチ栽培	部分マルチ栽培										
極早生	7月上旬～下旬	6月上旬～下旬											
早生	7月上旬～下旬	6月中旬～7月上旬											
普通	7月中旬～8月下旬	6月中旬～7月上旬											

(作成 果樹研究センター)